岡澤の家

永代美知代

成東から東金から、片貝、大原、一ノ宮と、九十九里沿岸一體に、春以來兎角引續いての不漁で、鰹も大漁と云ふことはなくて終になるし、夏中通して鰺もたんとはあがらず、一度だつてまとまつた大漁祝ひなぞして、人氣の立つたやうな事はなかつた。

だが此の古所は、同じ九十九里の中でも、とりわけ鰯を本漁の所だけに、毎年早秋から掛けて、脊黑がどつさり濱へ寄つて來るので、其の季節になると、女子供まで地曳網の方へ出て働いて大した金を儲ける。家々では家の周圍一杯に筵を敷いて、名物のごまめ干しに忙がしく、ちつとやそつとの不漁續き位は、直ぐにも盛り返へすことが出來るのである。

「片貝で此頃ホン貝が馬鹿矢鱈にとれるちうこんだ。」

「此方は不漁不漁で淋しいけれど、大原ぢやはあ大した鰺で、今度揃ひの大漁衣を造へるとよ。」

濱の人達は斯樣した噂を、市場歸りの若い衆だの、旅商人などから話して聞かされる事があつても、

「何だつて羨ましがることあつべ、俺が納屋でもはあ、今に脊黑さよるやうになつて見ろい、泣き言ばかり云ふ日もなかつべさ。」と、夜具から蚊張から、ありつたけのものを質屋へ持ち込んで、澄したもんだ。

だが今年は如何した譯か、今だに鰯網は不景氣だ。樂しんで待つた季節はとつくに過ぎて、此處いらて紐解きと云つてゐる、霜月十五日の七五三の祝日も、もう直ぐだと云ふ此頃になつても、脊黑は矢張りより〳〵しかあがらない、一日三度四度風の具合を考へて、折角地曳網をかけて見ても、其都度漁夫どもの手間にも足りなかつた。

暇々にはすく網代の帆待を入れた巾着を握つて、いかな日も濱へ買物に出ない日はない、お魚好きな岡澤の婆さんも、手拭を冠つて、寒い風に吹かれ乍らそゝけたやうな顏をして、又しても輕い籠をさげて歸り〳〵した。

赤いめりんすの襷だの、襦袢の袖口だの、前掛けだの、さうしたものを買ひに來る嫁御や娘つこもないので、自然荒物や太物の類を商つてゐる岡澤の店もさびれて、久しく仕入をしないまゝの棚には、四五尺殘つて色の褪せた黃木綿だの、麻の葉形だの、煤けた更紗だのが、ちよつぴりづゝ板に卷いて積まれてあつた。

もう二月も前頃から轉地療養のために此濱へ來てゐる、東京の奥さんと云ふのがある。以前その良人が學生時代に海水浴に來て世話になつた關係から醬油屋夫婦をたよつて來て、其處に泊つて居るのだが、此醬油屋はもと可成り盛にやつて居て、岡澤と隣り合せの二階屋に住んで居た。奥さんの良人が其二階の部屋を借りて、岡澤の隱居や家族とも懇意になり、毎晩お湯に入りに來たりなどしてゐた。そんなこんなで、奥さんも矢張り出入りして、身重で大きなお腹をかゝへて錢湯に行くのも極りが惡いからと、毎晩お湯を貰ふ事にしてゐる。

此若い奥さんより、少しは年上だが若い同志で話の合ひ相な姉さんと云ふのが岡澤にもある。奥さんが初めて此處へ來た頃、丁度姉さんは本納の方の親類へ、助司と云ふ七つになる其子をつれて行つて居た留守であつたせゐか、奥さんは兎角婆さんの方が親しいやうな氣がして、年寄りの夫婦の方へ餘計に馴染んで居た。奥さんは醬油屋さんから「岡澤の婆奴」と云つて、此處いらでは兎角お婆さんの評判がよくなくて「お婆さん、々々」と立てゝ居るのは、私等夫婦位なもんでげすと云つた風なことから、いろ〳〵な家庭の内情なんぞきかされた。

婆さんと云ふのは日光邊から流れて來て、茂原の宿場で飯盛りをして居たのを、隱居が若い頃迷つて一緒になつた人だ。岡澤はもと濱方對手とは云へ、此處いら切つて立派な店を張つた呉服屋で、婆さんが子持たずなもんだから、本納の取引き先から三つになる女の兒を貰つて育てた。それが今の姉さんだが、兎角婆さんとの間が面白くなくて娘の頃本納の實家へ逃げて歸つて居た事もあつた。今から十年ばかり前岡澤の家では放火をされて、親子三人寢卷一つで燒け出され、やつと今の家を買つて入つたのだが、昔の面影もない荒物屋に變つてしまつた。少々は田地もあり、貸金もあつた。そのため店こそみすぼらしくなつたけれども割合に呑氣にも暮らして居られる。其後間もなく姉さんに婿を貰つて、今の助司が出來たのだが、とかくうちはの折合が惡く、婿は姉さんがお産もしない前に逃げ出して、陸の方の實家へも歸らず、東京とか横濱とかて、また何處か婿入りして居る相だ。

脊が馬鹿に低くて、不格好な、頭の小さい、お尻の大きな、容色の惡い姉さんがあきられたのだと婆さんは云ふ。だが世間では婆さんが八釜しかつたやうに云つて、子供があるからとは云へ、婿も居ないのに、何を樂みと云ふてもない、姉さんはよく辛抱したのだと、そんな風に云つて居る。何にしろ婿が逃げてから今年はもう足掛け八年、其間には姉さんが本納の實家へ長逗留して、一年半年歸つて來なかつた事もあつた。今年は春から姉さんが病氣勝で、よく本納へ通つた。併しこれは相談づくで行つたので、病院通ひに都合の好いやうにと、夏内なぞ二月も行きつきりて居た。

隱居は人の好いものゝ解つた人だし、姉さんは愛想よして、岡澤の店は姉さんが居るから保たれて居るといつた有樣で、婆さんと來たらかう受けが惡い。放火をされたのも婆さんがむらきで言い度い事云うたため、人から怨みを受けたのだと云ふ噂さもある。第一賣物がけちで、一丈位買つた品だと五寸は大丈夫尺切れがすると云ふので、物事につましい漁夫の神さん達は、今では買物をしやうと思ふ時、まづ店をのぞいて見て、姉さんが居ればよし、それでなくて若し婆さん一人でゝも坐つて居ようものなら、そのまゝ通り越して他の店へ行くといつた有樣で。婆さんは又姉さんが何時迄も何時までもお客を對手に、くだらないお饒舌をして居るのが氣に入らない。

「又始まつた、何時まで饒舌つて居るだか。」

婆さんはきまつてぶつくさ云ふ。

「用あるだら呼ぶが好いてねえか。」

隱居は日當りの好い離れの六畳にあぐらをかいて、來る日も來る日も鰯網をすいたり古いのをたのまれて繕つたりしてゐる。傍には銀張りの長煙管と煙草入れが投げ出されて居て、小さな桐の丸胴の火鉢には、こつぽり火がいかつて、灰かきて綺麗にならしてある。伊賀越や大久保彦左衞門の講談本の上に、眞鍮の縁の大きな眼鏡が乘つて居て、隱居は氣が屈して來ると、ごろつと其處へよこになつてそれを讀む。

奥さんは毎日のやうに此處へ遊びに來て、十一時頃と四時頃きまつてお茶をよばれたものだ。奥さんの方て行かない日には、助司がわざ〳〵迎ひに來て、お婆さんが是非訊き度い事があるさうだからなどと云つて引張つて行

く。お茶うけは大抵甘藷のふかしたのか、照りごまめか、新澤庵、てつか味噌とそんな風なもので、時々は鰯の煮付とか、脊黒を三枚におろした刺身だのをすゝめられ、なまぐさのお茶うけに馴れない奥さんは、隱居を初め其處の家族が、丁度東京者がおそばをたべるやうに、脊黒の刺身を丼に盛つて、おろし大根を添へたのへ醤油をかけて、一寸箸の端に引掛けてはざぶり〳〵やるのを、妙な氣がして見るのであつた。大抵お茶場は離れないのだが、雨でも降つてうすら寒い日なんぞは、隱居が店の間へ据ゑられた長火鉢の傍へ來るので、自然お茶も此處で始まる。そんな時店へ買物に來合せた程のものは、皆庭に突立つたまゝで、愛想の好い姉さんが汲んで出すお茶をよばれて、お茶うけの新澤庵や、なめものゝやうなものを、お手くぼをして受けて頰張つた。

此お茶を盛んに飲むのは岡澤の家ばかりではない、古所一般どの家でも朝と晝の飯前と、それからお八つ時と日に三度は定つてのむ事にして、其外客があれば惣菜の殘りの芋や大根の煮染をお茶うけに出す。岡澤の家はそれが一倍烈しいだけの事だ。隱居がお客をすきて、奥さんなんぞも大變歡迎されて居る。婆さんは婆さんで、都風の奥さんから親のやうに親しまれるのが嬉しく、多少は自慢心で、よく一緒に濱へつれて行つて地曳網を見せたりしては他人の前で殊更「おめえがおめえが」と奥さんを呼んで、娘のやうな氣がするもんだからと、陰で奥さんに云ひ譯をした。奥さんは最初のうち、きたならしい濱方の婆さんから、そんな風な言葉を掛けられるのは嫌なやうな氣もして居たが、馴れると何とも思はなくなつてしまつた。

奥さんはまだ中々お産までには間もあるのだが、初めてのお産ではあり、東京に歸つて産むのだけれど、腹の中の子供の事を考へると、靜としては居られないやうな氣になつて、持つて來た荷物の中の有切で小さな襦袢や、ちやんちやんこを幾枚も幾枚も仕立てた。着物も造へて縫つて見たいと思ふのだが、有切も無くなるし、岡澤へ何日來て見ても、例の色の褪めたのだの、煤ぼけたのだの、少しばかり棚晒になつて居るばかりで、買ふやうなものもない。他の店へとも考へないではないが、折角こんなに親しくして世話になつて居ながら、そんな事をするのもよくないやうな氣がして、それでも今に紐解き前になつたらと、仕入れて來るのを待つて居た。その紐解も最う二十日たらずで來るのに、まだ仕入れをする樣子も見えなかつた。

「まだ仕入れなさらないの。」

姉さん一人で店番をして居る店へ上つて、火鉢の前に差向ひに坐ると、奥さんは棚を見ながら、思ひ切つて斯う訊いて見た。

「えゝもうしなけやいけないんですけれどもね、紐解き前で、家でも助が今年七つですからね、不景氣で何もしないと云つても、木綿着物の一枚位作へてやらなければなるまいし、種々考へてるですけれども、不景氣ですからねえ、漁さへありや直ぐにも仕入れに行かうと思つてますがねえ。」

本納の實家へ、いつか逃げて行つて、一年餘りも歸らなかつた時、助司だけ實家へ預けて置いて、暫く東京へ奉公に行つて居たこともあり、店の方を受持つておろし屋など澤山な人に接しつけて居るせゐで、姉さんは言葉に訛りも少ない。

「私もねえ、ほんの少しばかりですけれども、何か買ひ度いと思つて。」

「オヤさう、何かお仕立てなさるんですか。」

「ナニね、笑つちやいけませんよ、めりんすだのね、紅木綿が欲しいんですの。」

「あゝ解りました。赤さんのお支度でせう。」

姉さんが莞爾々々して云ふもんだから、奥さんは赤くなつてしまつた。

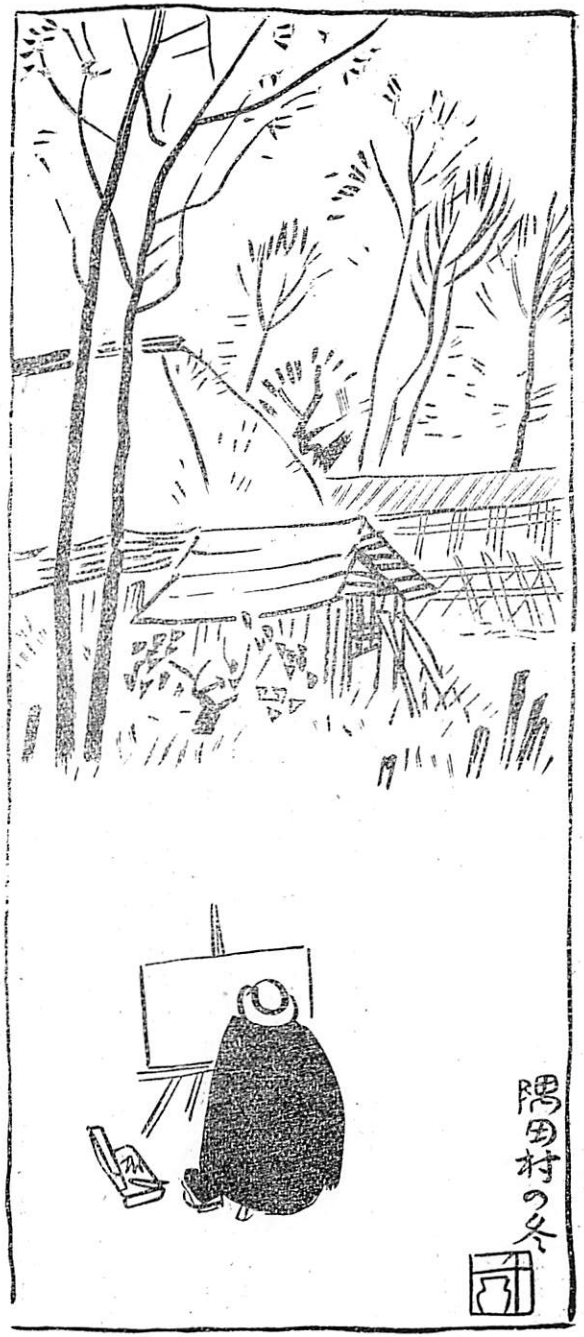
「大層お早いぢやありませんか、まだ些少もお腹も眼に立たない位ですのに、幾月目で被居いますの。」

「いゝえこんな大きなお腹になつて、もう五月にもなりますもの。」

云ひ乍ら奥さんは耻かし相に羽織の襟をかき合せて、お腹をかくすやうにしたが、いつか醤油屋の家で、腹の大きい小さいの話が出た時、醤油屋さんが、「それでも東京の方は一體に濱方の者共のがよりお腹が小さいと見えて、奥さんのがより岡澤の姉さんのがど大いかも知んねえよ。」と云つたのを思ひ出しそれとなく姉さんの方を見た。

「私なんぞ孕んでも如何もしてないんですけれど、こんなに大きなお腹で、地腹が大きんですねえ、本納のお醫

者に見て貰ひましたらね、子宮が悪いんだつて、それでこんなに下つ腹が大きくなるんですつて。」
「まあ左樣ですかねえ、そんなに大きくはないぢやありまんか。」
如何樣大きいとは思つたが、姉さんが甚くそれを苦にして居る樣子なので、わざとお世辭を云つた。
「でも五月だと云ふ奥さんがそれ位だのに、孕んでない私がこんなんですから、矢張り地腹が大きんですよ。」
「助ちやんの時は如何でして。」
「でも地腹の大きいその割に大きくもありませんでしたよ、だけども奥さんと一緒で、馬鹿に赤ん坊の事が氣になりましてねえ、早くから騒いで着物を縫つたりして、皆に笑はれましたよ、ですけどもね、矢張り早くから造へて、ちやんと支度しといた方がよござんす、段々月が重なるにつれて、氣が重くなつて面倒臭い仕事は嫌になりますからね。」
「私もさう思つて、いろんなもの縫つたんですけどもね、醤油屋の小母さんはまた、餘り産れない先きにいろんなものを造へると、よくない事があるつて、死んで産れたりするつて、さう云ひますの。」
「うそですよ、彼の人はあんな事ばつかり、何時だつて些少も支度くしないで置くけれど、彼の人の赤ん坊は皆死んで産れたり、産れると直ぐ死んでしまふぢやありませんか。以前家の隣りの二階屋に居る時分、毎年のやうに續けて孕んで、いつだつて支度もしないのに死ぬんですから、そんな事あてにはなりやしません。それよりか身の輕いうちに早く縫つたりして置く方が樂ですよ。」
「だから私も小母さんに悪いけど、構はないで造へますの、だけども最う有切を皆無にしちまつたもんですから。」
「家の店も此の通りですしね、其木綿なんか赤さんの物には矢張り藥だつて云ひますけども、これつぱかしぢや仕方もなし、待つてらつしやい、今に私が本納から取り寄せてあげますから。」
「いゝえお序で好いんですよ、私のはほんの少しばかり、紅木綿の二三反と黄木綿を一二反、それに無地の絣モスだの白のだの、めりんすも柄が好ければ二三枚着物の表だけ欲しいと思ふんですがね。」
「まあ、そんなに澤山、早く云つて下されば直ぐにも取り寄せてあげますのに。此處いらぢやあなた、大漁でも



あつた時でないと、めりんす三尺とまとまつて賣れるやうな事はないんですものね、置いといたつて棚ざらしになるばつかりてつまらないから仕入れないんですけ共、如何してあなた。奥さん程註文して下さりや、家て平常仕入れて來る丈けもあるんですから、明日にも私本納へ行つて來るやうにしませうよ。」

「左樣ですか、だけども本當にわざ〳〵ならよして下さい、却つて御迷惑だといけませんから。」

奥さんは姉さんが本納へ行くと、あとてよく婆さんがぶつくさ小言を云ふのを知つて居るので、自分のためにそんな風だとよくない氣がして斯う云つた。

「如何して迷惑なもんですか、それに助司の着物の都合もありますし、他からも少しは註文もあり、私も實家へ相談したい事がありますから、それ丈でも一度行つて來ようと思つてた位ですもの。」

「左樣ですかそいぢやどうぞ。めりんすね、如何しませう、姉さんに見立てゝ好い加減なのを買つて來て貰ひませうかしら、紅の入つた花模樣かなんか可愛いらしいのと、キッパリした男らしい紅の氣の入らないのとねえ。」

「えゝだけども奥さん、私が見立てゝ田舍つぺの柄を買つて來てもいけませんもの。」

「アラそんな事ありませんわ。」

とは云たものゝ、矢張り不安なやうな氣がしないでもない。初めて抱く自分の赤ん坊に田舍らしい柄は着せたくない。

「ねえ奥さん、絣モスの着物も可愛らしいぢやありませんか、よく東京て白の裏をつけて着せてますね、私可愛いと思つて。」

「えゝ、だから私初めからそれも造へるつもりて居たんですけども、幾枚も幾枚も同じ着物も可笑しいわねえ、そいぢやもし男の兒だと何ですから、紫の無地で一枚拵へて置きませう。それから餘り無地ばつかりも嫌ですわね、私どんな柄でも構はないから兎に角一丈ばかり姉さんが見立てゝ買つて來て下さいな。」

「ぢやよござんす、それに如何せ紐解き前ですから、幾ら不景氣だつて少し位賣れるてせうから、家でも少しは置いてよござんすから、ほかにも仕入れて來ませうし、あなたのに買つて來たのだつて、嫌な柄だつたらおよしになつても構ひません。東京だと好いのが澤山、よせぎれの中にだつて、ざらにありますわねえ。」

「本當にねえ。」

「それにお安いぢやありませんか、尺九錢位て一寸好い柄のがありますね。」

「だけどもあんなの切らせて買つたのと比べると、矢張り地合が惡いやうよ。」

「左樣ですかね、尤も價値は價値だけてせうからねえ。」

其處へお祖母さんが寒さうな顔をして、例の濱通ひの籠をさげて店口から入つて來た。

「アラお婆さん、お留守へ來てますのよ。」

「奥さんをつれてけばよかつたと、俺殘念した。」

云ひながら魚の一杯入つた籠を土間に置いて、上りがまちで足の砂を拂つて長火鉢の傍へよつて來た。

「お婆さん寒かつたてせう、さあ此方へいらつしやいな。」

「お前の傍が戀しいもんだて、俺魚も其儘にして上つて來たんだぞい。」

「まあ左樣。」奥さんはお婆さんのしなびた手を握つて「まあ冷い手。」と火の上へもつて行つてかざした。

「奥さんをつれて行かないて殘念したつて、漁があつたのかい。」

「あつたとも、まあ〳〵此頃にない漁だつぺ。」

「景氣立つたらうね。」

「久し振りの漁だものね、だが平常の年なら何でも無えだ。」

「それても些少あ店が忙しくなだらうね、何しろ紐解き前だから。ねえ阿母さん、家でも些少と仕入れようと思つて。」

「仕入れたつて何が、そんなに賣れもしめえよ。今日の漁位ぢやまだ〳〵不景氣は取り返へせねえて。」

「だけども幾ら何でも、これっぱかりの棚晒ぢや餘り甚かつぺ、それに奥さんも赤さんの着物の仕度があるつて、いろ〳〵註文して下すつたし。」

「赤さんの仕度がもう出來るのかい、此方で產んで呉れるがだと、俺どんなに樂しみだか知んねえんだが、可愛いのが出來る事だつぺ。」

姉さんへ返事もしないで奥さんの方を向いて莞爾々々して居る。

「魚は何だい、鰯かい。」

「あゝ俺寒いて、風引いても惡いから、お前ちよつくら洗うて干すやうにしてくんさろ、小鯛だの鰺だのちつとべい混つてるだから、三枚におろして、又お茶でも飲むべいよ。」

姉さんは籠を持つて裏の方へ行つた。

「どんな着物を造へるの、緋の唐ちりも可愛いらしいもんだよ、赤さんは矢張り赤いものが好い。」

「お婆さんの好きな赤い着物をどつさり造へますよ、お氣の毒だけどもお序にめりんすを取り寄せて頂いて。」

「好いとも、それでなくてさい、本納へ行き度くつて行き度くつて困つこる人があるだでね。」

「……」

「好い朝で御座えます。」小娘が入つて來た。

「おいてなさんし。」

「俺大部屋から來たのてやすが、千草の裏地が無かつぺか。」

「お前大部屋の使けえ、無かつたね。」

「そんだら黑の縫糸二錢だけくんなさろ。」

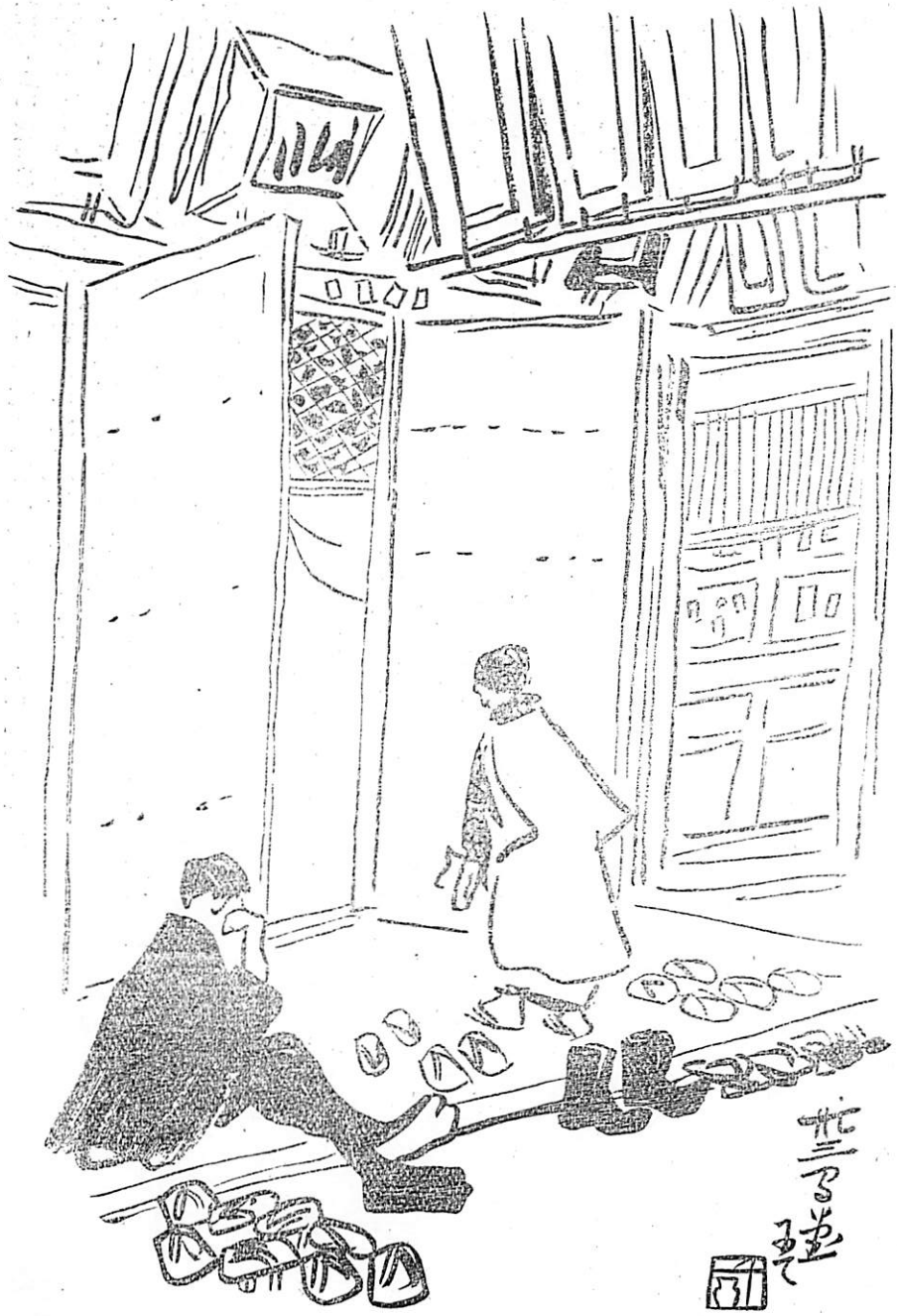
「はいはい。」

面倒臭相に立つて、引出を二つ三つ開けて見て、やつとしまひに見付け出して渡した。

「お金は？」

「今無えがて、つけといてくんなさろつて。」

娘は逃げるやうに出て行つた。と直ぐ、



「蓋生！前の貸さへ些少も入れやがらねえて、づう〳〵しいつたらない。」
奥さんは今の小娘に聞えはしないかと傍てはら〳〵した。
「こら、こんなものがちやんと隠してあるんだよ。」
婆さんは先刻開けた引出の中から、まだ青いやうな雲州蜜柑を、五つ六つも前掛の中へ入れて來て、
「奥さんは理不盡は嫌かい。」
理不盡と云ふ言葉が解らなかつたので、
「え？」と訊き返へした。
「これさ。」と色づいたやうなのを選んでむきながら「蜜柑の事だよ、此處の陸ぢやこれが理不盡に澤山なるもんだて、それて理不盡理不盡つて云ふやうになつたんだね。」
奥さんは大の柿好きて、東京に比べると馬鹿に價段は安し、毎日のやうに笊一杯買ひ込んて置く位だけれど、子供の時から蜜柑は餘り好きな方てなく、正月に入つて後のてなくては食べないのであつたが、今お婆さんがむいた蜜柑の匂をかぐと口一杯きみづが湧いて來て、何だが無性に食べたいやうな氣になつた。
「まあおいし相てすこと。私本當は餘り好きてなかつた筈なんてすけれど、何だか好い香をきいて、馬鹿に好きになつたやうよ。」
「さうかい、矢張りね、身重になると誰ても甚く、これだの青梅を好くもんだとよ。お前よけりやたんとあがつてお呉れ。だがまだ酸ばかつぺ。」
おいし相に酸い汁を吸ふ奥さんの顔をしげしげ眺めて、婆さんは自分ても二袋三袋食べて見て顔を顰めた。
此時前掛て濡れ手を拭き〳〵、何氣なく勝手から出て來た姉さんは、猫板の上に置かれた蜜柑を見ると妙な顔をした。
「誰かと思つたら。今其處の引出を開けると、誰が入れといたのかこれがあつたもんだて、奥さんと二人て食べとる處さ。」

姉さんはハッとしたが、何喰はん顔で、
「先刻餘り商人がせつくもんだて買つといたのだが、俺奥さんは蜜柑は餘り好きてないやうに聞いてたもんだから、出してもあげなかつた。まだ酸つぱいてせう。」
「酸ぱいのが好んだねえ奥さん、身重になると誰ても左樣だつて云ふから。」
「姉さんあなたも如何てす、私にはそんなに酸ぱくもありませんよ。」
「どれ。」
姉さんも口一杯きみづを湧して、遠慮らしい樣子て一つ丈け取つてむき〳〵、婆さんの顔色を氣にして居たが、しまひには目を細くして甘さうにしきりと食べた。

本納へ仕入れに行つた姉さんはまだ歸つて來ない。翌日の晩までには是非歸つて來るやうに、いつもと違つて紐解き前てはあり、漁も少しはありかゝつたから店も忙がしい。それに家ても助司の祝もしなければならず、旁早く歸らなければ困るからと、出してやる時呉れ〳〵も婆さんが云つて置いたのだが、姉さんは三日たつても歸つて來ないので、婆さんはぶつくさ口小言を云ひながら、勝手を働いたり、濱へ魚を買ひに出掛けたり、店番をしたり、一人て立つたり居たりしなければならなかつた。
隱居は姉さんが仕入れに行つた日のお晝頃、齋藤と云ふ地曳網の旦那から使が來て、豫ね〳〵隱居が貰ひたいやうに所望して置いた槻の木を根分けしてやるから、取りに來て呉れと沙汰があつたので、折が折とて一寸と困つたが、元々此方から望んて置いたのてはあり、旦那衆の事て對等同志のやうな勝手なこともいつて居られず、今貰つて來れば、早速破れた垣根を修繕して、紐解きの間にも合ふことと、隣りの茂三さんを頼んて、陸の先方まて荷車を曳いて一緒に行つて貰つて、それから引續いて毎日二人て垣根を修繕してゐる。姉さんが留守な上に隱居の手は借りられず、其上に懇意な仲てはあるが、他人が入つて居るので、婆さんは何彼と餘計することが多かつた。

「この人の魚好きにも何にも、俺おつたまげただ、日にや二度も濱さ出て、まるではあ眼玉の色を變へて騒ぐだもん。」

「何、俺魚好きは好きだけんど、俺一人の爲めに騒ぐてねえだ。此頃隱居が垣根さ修繕しに掛つて、他人さ頼んてあるだし、俺本當に忙しうておへねえんだが、紐解き前てこれ、今の内脊黑を買つてごまめ造へとかねえと、客人があつてもお茶うけに困るだつぺ、とそれ心配で俺氣い揉むだよ。」

「さう云へや助司さの紐解きだのし、俺うつかり思うて氣いつかなかつた、氣い揉める事だつぺ、俺うちの女子も來年だて、今からはあ心配してるだよ。」

「左樣だつぺとも、綺麗にして洒落さすにやあ女子の方張り合ひあるだて、樂みだつぺ。」

「何が、金あるだら好えけんど、斯う不漁續きぢやおへねえもんだよ。」

「何が來年まて不漁續きなもんか、その時やまたうんと買つてくんさろや、仕入れとくだて。」

婆さんは氣の向いた時には、買物に來た神さん達を相手にこんな話もした。愛想よくお茶をくんて出しもした。

「姉さんは？」と對手が物足りなさうに訊くと、

「本納さ仕入れに行つて、今日てもう三日にもなるがだに、まんだ歸つて來ねえだ。」

「忙しかつぺ、物前だて、幾ら不景氣だちても、お客も多かつぺから。」

「さうよ、おら一人でおへねえもんだて、折角くどいとる事だ。疊の表がへも、せめて離れの方だけてもせんなるめいし、氣忙しないがだに、いつまて本納さ泊り込んてる氣だか、自分が子の紐解きだちうに、好い氣なもんだよ。」

「ほんにさ、姉さん今年や矢鱈本納さ行くてねえか。助司さの世話だけてもお前大變だつぺに。」

「奴さ學校行くだて、餘り世話もやけねえがだけんど、あの人の本納にも困つたもんだ。行きたがつて行きがつて、行つたが最後、何時歸るもんだか、あてになんねえだ。」

「何だちてそんねえだか、里戀しい花嫁御でもあんめいし。」
「何だちてか。」
流石にこの上は云はないが、婆さんの胸には姉さんの樣子が腑に落ちないだらけて、此頃姉さんが本納へ行くのを不賛成なのも、そのためだ。
助司も半日學校へ行つて、歸つて來ると隱居の傍で、繩を持つて行つたり、木鋏を渡したり、土いぢりをしてまぎれて居るが、夕方なんぞしよぼけた樣子で門口に立つて居て、
「助司や、飯だぞい。」と隱居に呼ばれて、やつと正氣づいた樣に內へ駈け込み〳〵した。
夜寢るのも隱居と一緒で、平常は母親なんぞ如何でも好いやうな事を云つて居るのだが、居なくなると矢張り戀しいやうな樣子で、助司がいぢめられて泣いて歸ると、相手の子供の親の家へ談判に行つて呉れたりする婆さんが、例の機嫌買ひて子を持つた事のないため、うるさくなつて邪見な考を掛けたりするもんだから、嫌がつてなつかないそれを婆さんは憎く思つた。
晝前から隱居は鼻をつまらせて居たが、夕方垣根が出來上ると、小頭痛がすると云つて綿のあつぼつたく入つた褞衣を引掛けて、每晩自分の家の客人の奧さんが、お湯を貰ふからと云ふので、風呂水をくみに來ることに成つて居る醬油屋さんを對手に、將棋をしたりした。だが風邪氣だからと云つて、いつも一番に入る筈の隱居は湯には入らなかつた。明るいうちに奧さんは案內をうけてよばれて歸つた。其後で助司はお婆さんと一緒には入らない、明日又隱居と入るんだと云つて、どうしても一緒に入れようとする婆さんの云ふ事を聞かなかつた。
「勝手にしろい、此野郎奴！」
しまひに婆さんは腹を立てゝ、助司を引こぢいたり、つねつたりした。
「何しるだい、畜生！」
隱居が怒鳴ると婆さんは尙甚く助司にあたつた。
「止せやい、止さねえと承知しねえぞ。」

「何だい、俺ばつかり惡いてねえだ、それだのにお前がそんなだもの、此の野郎つけあがつておへねえてないか。」
「子供だもの、明日俺が入れてやると云つたら好えでねえか、喃助司や、もう寢べいか。」
「あゝ。」
口惜し相に婆さんから睨み付けられて、助司は隱居に寄り添うた。
「まだ俺湯にも入らねえだに、まだ早いだ、店番してくれたつてよかつぺい、思ひやりのねえ。」
婆さんが癖の小言を始めかけたので、
「俺も好きて云ふて無えだ。」
「そんだらゆつくり入つて來たらよかつぺ、俺面倒臭い、口小言大嫌ひだちうに。」
「だらよしたらよかつぺ、五月繩いやい。」
婆さんが湯桶の置いてある物置きへ行つたと思ふと間もなく、隱居の齒が痛んで來た。
「婆さんやい。隱居は顏をあげて呼んだ。
「何だい。」
「一寸來て呉んねえか、俺また齒が痛くなつて來た。」
「甚くかい？俺今やつと入つた處だに。」
「そんだら好いや。」
隱居は勝手から梅干と飯粒とを持つて來て、自分でそれをでつちて、いつもする通りに紙へのべて、痛む方の頰邊へ張つて見たが、痛みは中々容易の事ではをさまりさうもない。兩手で頰を抱へて、甚くなやましい顏をしかめて、隱居がうめくと助司は自分でも其都度一緒に呻つた。
「また明日學校あるだで、お前は其中でゞも寢てろよ、今に俺が又離れさつれてつてやるから。」
隱居が苦しい中から氣にして、婆さんが湯上りて直ぐ寢るつもりで取つて置いた、次ぎの間の寢床をさして云

つても、助司はさかないて、ついと何處かへ出て行つたと思ふと、やがてコカインの小さな瓶を持つて勇んで歸つて來た。

「お祖父さん、これつけると直ぐ治るだ、奥さんから俺しびれ藥貰つて來てやつたど。」

「おゝどれ。」

隱居は抱きゞめても足りない程いぢらしい氣がした。助司から瓶を受取つて見て、奥さんがよく齒が痛むと云つては持ち歩いて居た、其藥だと知つて、子供だのによく忘れないて居て氣がついた事だと、ぢつと助司の顔をみつめた。

「お祖父さん、お前早くつけると好いてねえか、痛い處い、そつとつけるんだとよ、でないと口中しびれるつて、奥さんがさう云つたど。」

「左樣か、お前一人で醬油屋へ行つたのかい、暗くて淋しかつたつぺ。」

「あゝん、淋しかなかつた。」

「助は强いなあ、俺本當に感心したぞい。」

助司はうれし相に笑つて見せたが、早くつけるやうにと、又してもすゝめ〳〵した。

「成程な。」

コカインをつけて、暫くしてつばを吐き出すと一緒に、隱居は全く感に絶えたやうな調子で云つて「助、治つたぞい。」

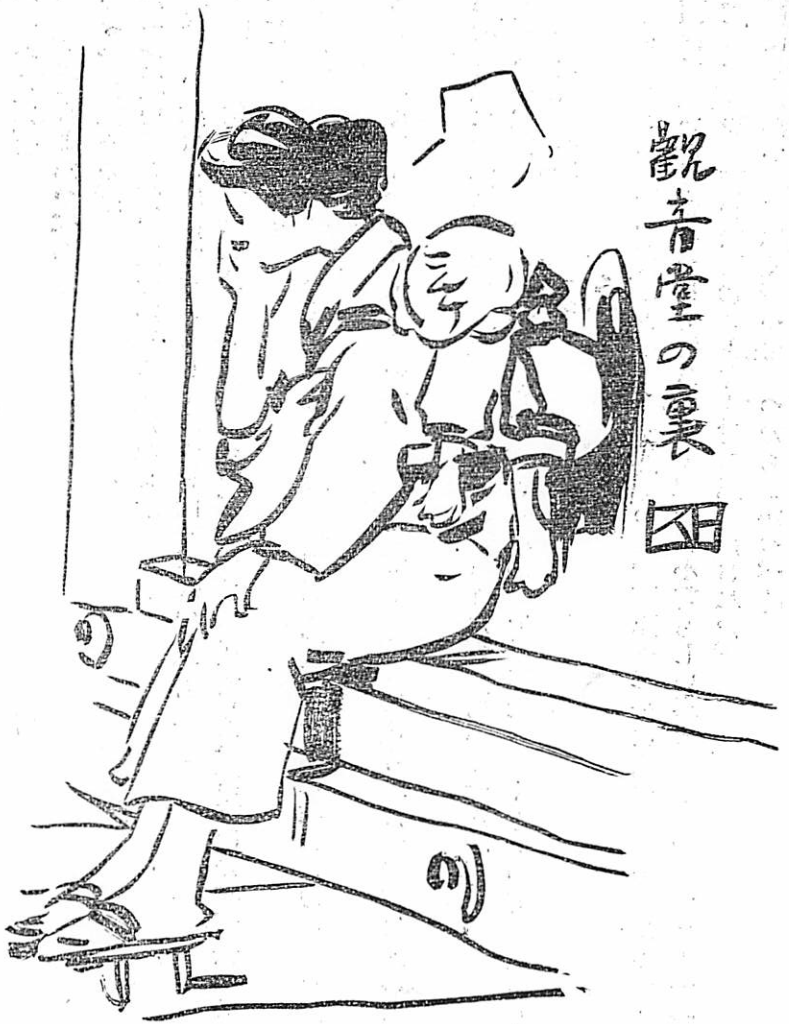
「奥さんの藥はよく利くがだね、梅干よか好いだらう。」

「好いにも。成程しびれるんだな。」一人で感心して瓶をながめて居たが、

「お前何を褒美にやつぺ、しやつぽかい、かばんかい。」

「あゝん、お祖父さんの眼鏡が好い。」

「眼鏡？これとられると俺眼なしになるだ。」


觀音堂の裏 四

「だからさ。」
「だら俺困るてねえか、第一何處へも行けなくなるだ。」
「俺手を引張つてやるだ。」
「ハッハッハ、そんだらよかつぺか。」
「貰つた、貰つた、萬歳々々。」
「助はまあ何時まで騒いどるだ、賑やかなこんだねえ。」
外から聲を掛けて、姉さんは提灯をともして障子を開けて入つて來た。
「阿母さんだ！」隱居に抱かれて、かけて居る眼鏡をいぢくつて居た助司は、筒抜けた聲で云つて振返へつた。
「歸りやした、どうも遲くなつて。」
脚袢をはいて、足が汚ないので、上りがまちへ手をついたまゝて挨拶をする姉さんの樣子を隱居は不興げに見て居たが、
「まあ〳〵歸つて來たらそれて何も云ふまいが、お前今日で三日にもなるもんだて、婆さんの機嫌の惡いのも無理ねえだ。」
「怒られるだつぺと思ひながら、つい病氣したりして居たもんだて、濟みません。」
「病氣ぢや難儀したつぺけんど、その事あ婆さんに云はんが好い、本納へ行くといつても病氣しるだつて、また嫌味を云はれる位なもんだて。」
「えゝ」
姉さんは濟まないと思つた。婆さんとの折合が惡くつて、東京へ奉公に逃げて行つて居た時も、隱居は內證て本納の實家へ預けて置いた助司をつれて逢ひに來て、別に小言らしい事も云はず、一緒に上野や淺草を歩いて、牛屋や、てんぷらを奢つて貰つた時のことなんぞも思ひ出された。
「婆さんが湯をぬくと惡いて、早く行つて溫つたらよかつぺ。」

「有り難う御座えやす。」姉さんは言葉まて自と改たまつた。だが婆さんの入つて居る湯場へ行つて、顏を合せるのはどうにも嫌てならなかつた。たゞては濟むまいと思ふと、猶更ら思ひて幾度となく戶口まて行つては引返して、ためらつた。

隱居の齒の痛みは如何なつたか、奧さんは氣になるので、朝飯を九時頃に濟ましてすぐ岡澤へ見舞ひに出掛けて行つた。店には思ひ掛けもない姉さんが坐つて居た。
「オヤ、いつ御歸んなすつて、昨夜？」
「えゝ。」
愛想の好い人だのに、どうしたのだらうと奧さんが不思議に思ふ程姉さんは、氣の浮かない顏をして、眼を赤くして、泣いた後のやうに見うけられた。
「お祖父さんのお齒は如何ですの。」
「有り難う、お蔭てもうよくなつたやうですの。」
「離れにゐらつしやいますんてせう。」
「えゝ。」
いつものやうにまあ上つて、此處てお話しなさいとも云はない。奧さんは離れの方へ廻つた。
離れては隱居と婆さんとが氣まづい顏をして、默つてそれ〳〵內職の網をすいて居たが、隱居がまづ口を切つて、
「昨夜はどうも有り難う。不思議な妙藥て、含んだと思ふと、すぐ治りましただ。」
「左樣でしたか、どうかと思つて心配しましたの、矢張り初めの中はよく利きますけれどもね、私のやうに始終つけてると馴れつこになつて、些少もきかなくなりますの。」
「左樣だつぺね、齒の藥ちうものあ、一體に時々違つた藥を用ゐた方が好いさうだから、だが不思議な妙藥だ、

奥さんは如何して手に入れなすつたゞね？」
「實はあの藥劇藥なんてすけ共、懇意な齒醫者に頼んて內證て貰ひましたの？。」
「うむ、劇藥かね、左樣だつぺ、道理てよくきく。」
婆さんは此間も不機嫌な樣子て、奥さんが來てゐるのも知らないと云つた風て居た。
「何か有つたに違ひない。」入つて來た誰にてもさう感じられる程、家の中の空氣が冷たくて、胸苦しいやうな氣がして、奥さんはすぐに歸つて行つた。
離れから店の横手の庭を通つて切戸を出た處に井戸がある。大根を洗つて居た姉さんは、まぶしさうに膨れぼつたい眼をあげて、につこり奥さんに會釋した。
「もうお歸り？そいぢや夕方又お湯にいらつしやい。御註文のものはね、あとから送らせる事にして來ましたから、多分明日の朝か、若しかしたら今晩位着くかも知れませんよ。」
「まあさうですか有難う。」
奥さんはぶら〳〵道草を喰べながら歩いた。と手拭を冠つて新らしい前掛をしめ、舌切雀の爺さんが着て居るやうな青縞の袖無しを着た岡澤の婆さんが、追つかけるやうについて來て、いきなり肩を打つた。
「あらお婆さん！」奥さんは驚ろいて振り返へつた。
「お前折角來てお呉れだに、俺無愛想して濟まなかつただ。種々心配事出來湧いたてね。」
「まあ左樣！どんな？」
「どんなちて、俺お前だから話しるだけんど、世間さ申譯も無いやうな事さ出來湧いたてね、誰にも內證にして呉んなさろだが、實は俺家ぢや婿を貰ひますぢや。」
「あら左樣！」何故それが世間へ申譯がないのか、と云つた風な調子て云つた。
「只婿さ貰ふだら大威張りて目出度いのがだけんど、奥さんにやまだ氣い付かぬいだか、俺腑に落ちん事だらけだて、それとなし氣いつけて見とると、愈〻それらしいんだね、遂々昨夜さ、すつくり白狀べいし居つたが、も

うお前四月にもなるんだとよ。そいだもんだで、本納さ行きたがつて、俺よくもよくも馬鹿にしたと思つて腹立つだよ。」

「まあ左樣てすかねえ。」

「俺自身の娘だら叩き出して呉れるだけれど何しろ義理の仲だで、默つてるだが、隱居はハア、出來たもんなら仕方もなかつぺだなんて、人の好い事べい云ふもんだで、俺ふんとに忌々しいだよ。」

「左樣てすかねまあ。」奥さんは此の場合どんな返事をして好いのか解らなかつた。婆さんは焦々した樣子て二人共默つて歩いた。

「お寄んなさいませんか。」

醬油屋の前まて來ると、立ち止まつて奥さんは婆さんを誘つた。

「まあ又にしべい。俺類家までちよつくら急ぎの用事あるだ。」

「お茶てもあがつて被行れば好いのに。」

其言葉を聞き捨てゝ、婆さんはすたこら別れて行つた。

其晩奥さんがお湯を貰ひに行くと、長火鉢の傍で、隱居と助司と婆さんと姉さんと二つの膳に差向つて、何の事もなさ相に夕飯を食べて居た。一緒に行つた醬油屋の神さんが湯加減を見て、好い氣持ちに溫つた奥さんが、神さんの出て來るまて店て待ち合すつもりて庭を通つて來ると、誰やら黑い影が店の横手の壁に寄り添うて居る。

「誰？姉さん？」

家の中の憚つたやうな話聲に耳を澄して居た姉さんは、周章てゝ壁を離れたが、默つて奥さんの手を執り、切戸から井戸端へ出て、奥さんの耳へ口を寄せ、

「本納の父が來ましたの。私內證で中の話を聞いてたんだから、その心算て居て下さい。」

「そいぢや私此儘歸りますわ、醬油屋のお母さんに左樣云つといて頂戴な。」

「濟みません、又明日被入いましよ。」姉さんは切なさうに、莞爾して見せた。（をはり）